

「リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ」に関する調査Ⅷ 第2報
— デートDVにおける男女差について —

西岡 敦子^{*1} 小牧 一裕^{*2}

Research in Reproductive Health and Rights VIII-2
Gender differences in date violence

Atsuko Nishioka^{*1} Kazuhiro Komaki^{*2}

Abstract

The purpose of this study was to determine the current incidence of date violence by males and females, and investigate the relationship between assailants and victims and the characteristics of both.

There were 361 undergraduate participants of whom 195 were female and 166 male. Major findings were that: 1) The common stereotype that males are assailants and that women are victims is incorrect. 2) Social factors and special privileges were high in the cases both victims and assailants of date violence. 3) With male assailants, there was a high rate of sexual assault and coercion, and almost 30% of male victims had suffered physical attack. 4) It was established that some people are both victims and perpetrators of date violence. 5) Male assailants showed a strong gender role and male victims suffered from low self-esteem.

Overall, men, both victims and assailants, had little knowledge about date violence. In addition it was shown that restraint was a problem for both men and women.

キーワード

リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ、デートDV、男女差、ステレオタイプ、束縛感

*1 にしおか あつこ：大阪国際大学人間科学部准教授〈2008.12.10受理〉

*2 こまき かずひろ：大阪国際大学人間科学部教授

I. 問題

これまで、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの概念のもと、大学生を対象に様々な調査を継続してきた。今回も、前報に引き続き、若者の間で問題視され始めているデートDVについて取り上げる。

デートDVを取り上げるにあたっての問題提起は前報のとおりである。ここでは、異性との付き合い方の変化やジェンダー意識についての記述を挙げ、考察につなげたいと考える。

2007年に産業地域研究所がマクロミルに依頼して行われた「MJ若者意識調査」(18～44歳の男女3094人を対象にインターネット上で実施)によると、異性との付き合いが「面倒・わずらわしい」と思う人は、30%近くあり、30～44歳既婚の独身時(10%)の3倍近いという結果がでている。筆者も彼や彼女がいらないと考える学生に出会った。その理由を尋ねると、やはり、自分の好きなことができなくなる、相手に束縛されるのはいや、という回答であった。彼、彼女の関係は、お互いを尊重し、喜びや悲しみを共有するものであると考えられるが、実際はそのようなには捉えられていないようだ。また、上述の調査では、従来の彼、彼女の役割意識に変化がでているとの記述もある。男性側がデートを仕切らなくなり、デートの費用分担も男性主導は減ったようだ。さらに、デート消費の変化から、男女の役割分担の希薄化についての記述もあり、男性の上昇志向や稼ぎ手意識とともに古い「男らしさ」の意識が後退したこと、女性はそのような男性に頼らなくなったとの分析である。

しかし、一方で、青年期の恋愛関係において、赤澤(2006)は、固定的な性別役割分業観が影響を及ぼしている可能性があるという指摘をしている。例えば、男性の否定的行動が、女性の女性役割行動の規定因としてあるとのことである。男性の「相手をなぐる」、「相手をばかにする」という否定的行動が、女性の「食事や弁当を作る」、「相手の部屋を掃除する」といった献身的な女性役割行動の遂行度を高めるというのである。

異性間の付き合い方に変化の兆しはあっても、深いところでは、まだまだ男女のジェンダー意識は根強いと考えられそうである。

前報では、先行研究をもとに、性別役割意識、怒り、他者尊重やアサーションを含む社会性、関係性への満足や力関係、自尊感情を関連要因として取り上げ、大学生におけるデートDVの現状を把握し、被害と加害の関係やそれらの特徴を探索的に検討した。しかし、そこでは、男女別の分析に至らなかったため、若干の新たな被調査者を含めて男女別に分析し、大学生におけるデートDVの男女の現状を把握し、被害と加害の関係やそれらの特徴の性差を探索的に検討することを本研究の目的とする。

II. 方法

II-1. 被調査者

被調査者は、本大学に在籍する学生を中心とした大学生である。また、有効回答数は前報の女性246人、男性209人に、今回の被調査者である、女性26人、男性25人を加えた計506人であった。その内、DVに関する調査であるため、現在、および、過去を通じて恋人

と呼べる人がいない者を除いた、前報の女性177人、男性147人に、今回の該当者である女性19人、男性18人を加えた女性195人、男性166人の計361人を分析対象とした。その内訳は、Table1のとおりである。

Table1 分析対象者

	女性	男性	計
18歳	60	38	98
19歳	60	39	99
20歳	41	24	65
21歳	24	26	50
22歳	6	32	38
23歳	3	3	6
24歳	1	4	5
計	195	166	361

Ⅱ-2. 調査方法

調査方法は質問紙による無記名回答方式で集団調査法を用いた。なお、質問紙への回答の可否は被調査者自身で選択可能である。なお、実施時期は2007年8月、9月および、2008年7月である。

Ⅱ-3. 調査項目

設問項目は前報と同様であり、A~Hまでの8つから構成される。ここでは項目と評価方法のみを挙げる。

設問Aは、「怒り」を問うものである。10問から成り4件法であり、得点の高い方が特性怒りが高いとされる。

設問Bは、「恋人と呼べる人の存在の有無」を問うものである。

設問Cは、「恋人と呼べる人との関係性」について問うものである。下位尺度として、関係満足は3問、関係束縛は2問の計5問から成り5件法であり、得点の高い方が関係性が良好である。また、双方の力関係の1問は、5件法であり、得点の高い方が相手の方が強く、得点の低い方が自分の方が強いことを表している。

設問D-1は、「DV被害の種類とその度合い」を、設問D-2は、「DV加害の種類とその度合い」を問うものである。各々25問から成り5件法であり、暴力の頻度が高い方が高得点となる。なお、暴力の種類は、直接的、間接的、その他に分けられているが、一方で、身体的、心理的、経済的、社会的、性的、強要、特権、過小評価にも分類できる。

設問Eは、「社会性」を問うものである。下位尺度として、アサーションが7問、他者尊重が5問、基本的社会性が6問の計18問から成り5件法であり、社会性が高い方が高得点となる。

設問Fは、「ジェンダー」を問うものである。5問から成り5件法であり、性役割に対して平等主義的である方が高得点となる。

設問Gは、「自尊感情」を問うものである。10問から成り5件法であり、自尊感情が高い方が高得点となる。

設問Hは、「DVの知識」を問うものである。3問2件法であり、DV知識のない方が高

得点となる。

最後に、フェイス項目として、性別と年齢を問うもの2問を加え、総設問数は106問である。

Ⅲ. 結果

Ⅲ-1. DV被害およびDV加害の男女差

1) DV被害経験および加害経験の男女差

「DV被害の種類とその度合い」、「DV加害の種類とその度合い」を問う各々25問に対して、1問でも、そのDV暴力経験が「1度でもあった」と回答した者(26点以上)は、「DV暴力経験があった」として、DV暴力経験を算出した結果がTable2である。

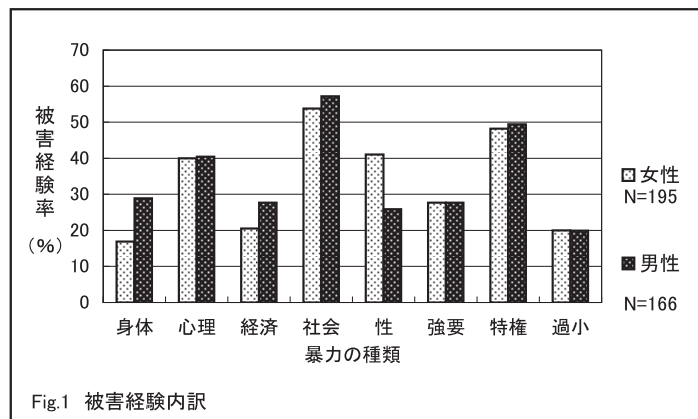
Table2 暴力経験の有無

	被害経験(%)	加害経験(%)
女性 N=195	148(75.9)	111(56.9)
男性 N=166	123(74.1)	113(68.1)
計 N=361	271(75.0)	224(62.0)

被害経験は男女共に75%程度有り(女性75.9%、男性74.1%、全体75.0%)、加害経験は女性が11ポイントほど少ないものの、男女で約6割の者が加害経験がある(女性56.9%、男性68.1%、全体62.0%)と回答している。

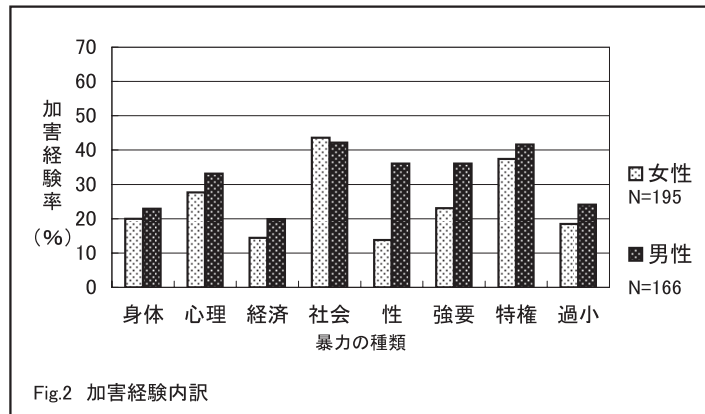
2) DV被害経験およびDV加害経験の内訳の男女差

「DV被害の種類とその度合い」、「DV加害の種類とその度合い」を問う各々25問に対して、身体的、心理的、経済的、社会的、性的、強要、特権、過小評価の分類別に暴力経験の内訳を見た。その分類内の1問でも、DV暴力経験が「1度でもあった」と回答した者(26点以上)は、その分類の「DV暴力経験があった」として、DV暴力経験の内訳を算出した結果がFig.1である。



男女共に経験率の高い被害は、「社会的」な項目（「あなたの行動を制限する」、「勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックされる」など）であり、女性の53.8%、男性の57.2%が被害を受けている。同様に、「特権」の項目（「相談なしに二人にとっての重要な決定を相手がしてしまう」、「相手の考えをあなたに押しつける」など）も高く、女性48.2%、男性49.4%であった。また、「心理的」な項目（「あなたを侮辱するようなことを言ったり、したりする」、「あなたの持ち物を壊す」）も高く、女性40.0%、男性40.4%であった。一方、男女差のある項目として、「性的」な項目（「コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力しない」、「断っても、無理やり、セックスされる」など）は女性41.0%、男性25.9%と女性の方が高率であった。意外にも、「身体的」な項目（「あなたに平手打ちをすることがあった」、「包丁などの凶器であなたを攻撃することがあった」など）が女性16.9%、男性28.9%と男性の方が被害経験率が高かった。

被害経験と同様に、加害経験の内訳を算出した結果がFig. 2である。

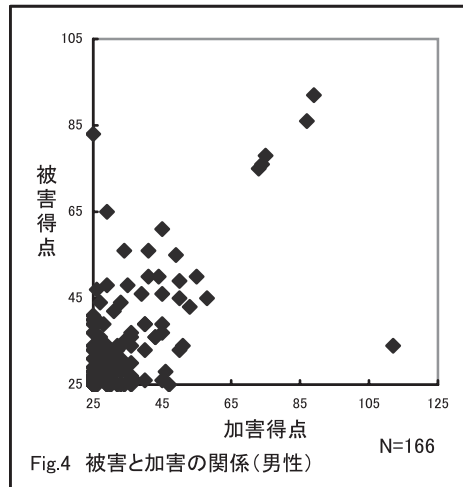
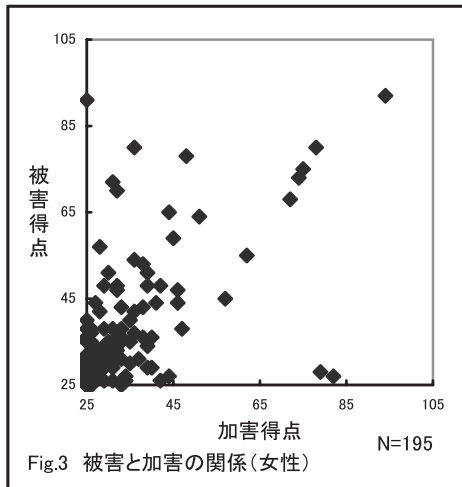


加害経験も被害経験と同様に、男女共に「社会的」な項目が女性43.6%、男性42.2%、「特権」の項目が女性37.4%、男性41.6%と高い経験率であった。しかし、「性的」な項目は女性13.8%、男性36.1%と男性は女性の2.5倍以上の加害経験率であり、「強要」の項目（「物をたたきつけて相手をおどす」、「別れるぞ」「自殺する」などと相手をおどす」など）も女性23.1%、男性36.1%と、男性の加害経験率のほうが高かった。

3) DV被害とDV加害の関係の男女差

「DV被害の種類とその度合い」、「DV加害の種類とその度合い」を問う各々25問の得点の合計を、各々DV被害得点、DV加害得点とし（各々25～125点）、両者の関係性を見たものがFig. 3およびFig. 4である。

女性も男性もほぼ同様の結果であった。



Ⅲ-2. DV被害者、加害者およびバトルの男女の特徴

DV被害者、DV加害者およびバトル群の男女の特徴を探るため、分析対象者の群分けを行った。結果の一覧はTable3のとおりである。

Table3 被害、加害およびバトルの程度による群分け

	被害なし群(%) =25	被害中低群(%) 26 ≤ ≤37	被害高群(%) 38 ≤
被害得点			
女性 N=195	47(24.1)	107(54.9)	41(21.0)
男性 N=166	43(25.9)	88(53.0)	35(21.1)
計 N=361	90(24.9)	195(54.0)	76(21.1)

	加害なし群(%) =25	加害中低群(%) 26 ≤ ≤37	加害高群(%) 38 ≤
加害得点			
女性 N=195	84(43.1)	82(42.1)	29(14.9)
男性 N=166	53(31.9)	82(49.4)	31(18.7)
計 N=361	137(38.0)	164(45.4)	60(16.6)

	被害加害なし群(%) =25	バトル中群(%) 29 ≤ ≤34	バトル高群(%) 38 ≤
被害×加害得点			
女性 N=195	40(20.5)	17(8.7)	20(10.3)
男性 N=166	31(18.7)	20(12.0)	20(12.0)
計 N=361	71(19.7)	37(10.2)	40(11.1)

上述のように「DV被害の種類とその度合い」、「DV加害の種類とその度合い」を問う各々25問の得点の合計を、各々DV被害得点、DV加害得点とした(各々25~125点)。

被害群では、DV被害経験が「1度もなかった」と回答した者、すなわち、25点の者が「被害なし群」である。そして、残りの分析対象者数をほぼ二分する31.5点を中心として、26点以上37点以下を「被害中低群」、38点以上を「被害高群」とした。加害群も同様にし

て、「加害なし群」、「加害中低群」、「加害高群」に分類した。また、バトル群は、DV被害経験も、DV加害経験も共に「1度もなかった」と回答した者が「被害加害なし群」であり、「バトル中群」はDV被害経験もDV加害経験も共に29点以上34点以下の者、「バトル高群」は同じく、38点以上の者とした。

1) DV被害者の特徴の男女差

DV被害者の特徴を探るため、まず、3群での諸変数の平均値を比較するための一要因の分散分析を行い、次に、Tukey法（5%水準）による多重比較を行った。3群の平均値と結果をTable4に示した。

Table4 被害程度による平均値比較

	A 被害なし群 (全体: N= 90) (女性: N= 47) (男性: N= 43)		B 被害中低群 (全体: N=195) (女性: N=107) (男性: N= 88)		C 被害高群 (全体: N= 76) (女性: N= 41) (男性: N= 35)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A-B	B-C	A-C
基本的社会性	22.04	4.95	22.21	4.27	20.08	5.81		*	*
	23.21	3.61	22.38	4.13	20.63	6.30			*
	20.77	5.88	22.00	4.44	19.43	5.18		*	
怒り得点	22.46	5.04	23.39	5.00	24.82	6.56			*
	22.89	4.76	23.47	4.63	25.29	5.70			
	21.98	5.35	23.31	5.44	24.26	7.49			
関係満足	12.14	2.57	12.34	2.48	10.91	3.09		*	*
	12.45	2.49	12.42	2.68	11.02	2.79		*	*
	11.81	2.64	12.24	2.21	10.77	3.44		*	
関係束縛	6.84	1.69	5.99	1.97	4.53	2.19	*	*	*
	7.11	1.66	6.24	1.92	4.17	2.11	*	*	*
	6.56	1.70	5.69	2.00	4.94	2.24			*
力関係	2.96	1.02	3.01	1.11	3.34	1.18			
	2.98	0.79	3.07	1.14	3.27	1.29			
	2.93	1.22	2.93	1.08	3.43	1.07			
DV知識	4.36	1.06	4.28	1.04	4.50	1.13			
	4.26	0.97	4.17	1.01	4.07	1.01			
	4.47	1.16	4.41	1.07	5.00	1.06		*	
自尊得点	30.60	6.64	29.98	6.20	28.34	7.00			
	30.09	7.68	29.70	6.19	28.83	7.35			
	31.16	5.30	30.33	6.23	27.77	6.63			*
他者尊重	18.18	4.02	18.73	3.55	17.82	3.95			
	18.96	3.32	19.06	3.10	17.95	4.28			
	17.33	4.55	18.33	4.01	17.66	3.58			
性役割	18.33	4.06	18.13	4.21	17.21	4.38			
	18.91	3.38	18.98	3.80	18.44	4.35			
	17.70	4.66	17.10	4.46	15.77	4.01			
アサーション	23.26	6.57	23.47	5.57	22.50	6.32			
	24.28	6.08	23.97	5.46	23.76	6.09			
	22.14	6.97	22.85	5.68	21.03	6.36			

上段:全体、中段:女性、下段:男性

*:p<.05

①DV被害者（全体）

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、関係満足（ $F(2,358) = 8.25, p < .001$ ）、関係束縛（ $F(2,358) = 29.59, p < .001$ ）、基本的社会性（ $F(2,358) = 5.67, p < .01$ ）、怒り得点（ $F(2,358) = 4.00, p < .05$ ）、力関係（ $F(2,358) = 3.13, p < .05$ ）であった。Tukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の被害なし群（ $\bar{X} = 22.04$ ）、被害中低群（ $\bar{X} = 22.21$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 20.08$ ）の得点よりも高く、関係満足の被害なし群（ $\bar{X} = 12.14$ ）、被害中低群（ $\bar{X} = 12.34$ ）の得点は、DV被害高群（ $\bar{X} = 10.91$ ）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は他の群よりも社会性が低く、関係に満足していないことを示していた。また、怒り得点の被害なし群（ $\bar{X} = 22.46$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 24.82$ ）の得点よりも低く、「高群」では怒りの得点が高いことを示していた。関係束縛の被害なし群（ $\bar{X} = 6.84$ ）、被害中低群（ $\bar{X} = 5.99$ ）、被害高群（ $\bar{X} = 4.53$ ）のそれぞれの得点間に有意差が認められ、「なし群」「中低群」「高群」の順に、束縛感を強く感じていることを示していた。

②DV被害者（女性）

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、関係束縛（ $F(2,192) = 27.81, p < .001$ ）、基本的社会性（ $F(2,192) = 3.66, p < .05$ ）、関係満足（ $F(2,192) = 4.51, p < .05$ ）であった。Tukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の被害なし群（ $\bar{X} = 23.21$ ）の得点は、被害高群（ $\bar{X} = 20.63$ ）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は「なし群」よりも社会性が低いことを示していた。また、関係満足の被害なし群（ $\bar{X} = 12.45$ ）、被害中低群（ $\bar{X} = 12.42$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 11.02$ ）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は他の群よりも関係に満足していないことを示していた。また、関係束縛の被害なし群（ $\bar{X} = 7.11$ ）、被害中低群（ $\bar{X} = 6.24$ ）、被害高群（ $\bar{X} = 4.17$ ）のそれぞれの得点間に有意差が認められ、「なし群」「中低群」「高群」の順に、束縛感を強く感じていた。

③DV被害者（男性）

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、関係束縛（ $F(2,163) = 6.54, p < .01$ ）、基本的社会性（ $F(2,163) = 3.47, p < .05$ ）、関係満足（ $F(2,163) = 3.92, p < .05$ ）、DV知識（ $F(2,163) = 3.84, p < .05$ ）、自尊得点（ $F(2,163) = 3.26, p < .05$ ）であった。Tukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の被害中低群（ $\bar{X} = 22.00$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 19.43$ ）の得点よりも高く、関係満足の被害中低群（ $\bar{X} = 12.24$ ）の得点は、被害高群（ $\bar{X} = 10.77$ ）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は「中低群」よりも社会性が低く、関係に満足していないことを示していた。同様の結果としては、DV知識の被害中低群（ $\bar{X} = 4.41$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 5.00$ ）の得点よりも低く、「高群」は「中低群」よりもDV知識が低いことを示していた。また、関係束縛の被害なし群（ $\bar{X} = 6.56$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 4.94$ ）の得点よりも高く、「高群」は「なし群」より束縛感を強く感じていた。同様の結果として、自尊感情の被害なし群（ $\bar{X} = 31.16$ ）の得点は被害高群（ $\bar{X} = 27.77$ ）の得点よりも高く、「高群」は「なし群」より自尊感情が低いことを示していた。

2) DV加害者の特徴の男女差

被害者と同様に、DV加害者の特徴を探るため、まず、3群での諸変数の平均値を比較するための一要因の分散分析を行い、次に、Tukey法（5%水準）による多重比較を行った。3群の平均値と結果をTable5に示した。

Table5 加害程度による平均値比較

	A 加害なし群 (全体: N=137) (女性: N= 84) (男性: N= 53)		B 加害中低群 (全体: N=164) (女性: N= 82) (男性: N= 82)		C 加害高群 (全体: N= 60) (女性: N= 29) (男性: N= 31)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A-B	B-C	A-C
基本的社会性	22.00	5.04	22.23	4.47	19.68	5.03		*	*
	22.54	4.44	22.52	4.64	20.41	4.86			*
	21.15	5.82	21.94	4.29	19.00	5.17		*	
怒り得点	22.47	4.81	22.96	5.21	27.10	5.87		*	*
	22.68	4.52	23.78	5.03	26.52	4.98		*	*
	22.13	5.27	22.13	5.29	27.65	6.63		*	*
関係満足	12.02	2.65	12.10	2.70	11.62	2.78			
	12.17	2.74	12.06	2.75	12.24	2.59			
	11.79	2.50	12.13	2.67	11.03	2.86			
関係束縛	6.39	1.88	5.81	2.06	5.00	2.38	*	*	*
	6.51	1.99	5.77	2.15	5.28	2.33			*
	6.21	1.70	5.85	1.98	4.74	2.44		*	*
力関係	3.07	1.05	3.04	1.13	3.12	1.22			
	3.06	1.00	3.09	1.15	3.17	1.26			
	3.08	1.12	3.00	1.11	3.06	1.21			
DV知識	4.41	1.07	4.18	0.98	4.65	1.22		*	
	4.32	1.01	4.05	0.97	4.07	1.03			
	4.55	1.15	4.30	0.98	5.19	1.14		*	*
自尊得点	30.55	6.21	29.57	6.85	28.68	6.14			
	30.07	6.80	29.46	7.00	28.69	6.34			
	31.30	5.10	29.67	6.74	28.68	6.05			
他者尊重	18.47	3.96	18.79	3.47	17.17	3.88		*	
	18.93	3.66	19.05	3.05	17.72	3.74			
	17.75	4.35	18.52	3.84	16.65	3.99			
性役割	18.13	3.73	18.21	4.35	17.07	4.81			
	18.65	3.67	18.98	3.81	19.07	4.35			
	17.30	3.71	17.44	4.73	15.19	4.51		*	
アサーション	23.61	6.35	23.01	5.73	22.85	5.88			
	24.45	5.73	23.59	5.64	23.86	6.02			
	22.28	7.07	22.43	5.81	21.90	5.69			

上段:全体、中段:女性、下段:男性

*:p<.05

①DV加害者（全体）

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、怒り得点（ $F(2,358) = 18.11, p < .001$ ）、関係束縛（ $F(2,358) = 9.91, p < .001$ ）、基本的社会性（ $F(2,358) = 6.60, p < .01$ ）、DV知識（ $F(2,358) = 4.84, p < .01$ ）、他者尊重（ $F(2,358) = 4.19, p < .05$ ）であ

った。Tukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の加害なし群（ $\bar{X}=22.00$ ）、加害中低群（ $\bar{X}=22.23$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=19.68$ ）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。また、怒り得点の加害なし群（ $\bar{X}=22.47$ ）、DV加害中低群（ $\bar{X}=22.96$ ）の得点はDV加害高群（ $\bar{X}=27.10$ ）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。また、DV知識の加害中低群（ $\bar{X}=4.18$ ）の得点は、加害高群（ $\bar{X}=4.65$ ）の得点よりも低く、「高群」では「中低群」よりも知識が低いことを示していた。同様の結果として、他者尊重の加害中低群（ $\bar{X}=18.79$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=17.17$ ）の得点よりも高く、「高群」は「中低群」よりも他者尊重が低いことを示していた。さらに、関係束縛の加害なし群（ $\bar{X}=6.39$ ）、加害中低群（ $\bar{X}=5.81$ ）、加害高群（ $\bar{X}=5.00$ ）のそれぞれの得点間に有意差が認められ、「なし群」「中低群」「高群」の順に、束縛感を強く感じていた。

②DV加害者（女性）

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、怒り得点（ $F(2,192) = 6.88, p < .001$ ）、関係束縛（ $F(2,192) = 4.68, p < .01$ ）であった。Tukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、怒り得点の加害なし群（ $\bar{X}=22.68$ ）、加害中低群（ $\bar{X}=23.78$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=26.52$ ）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。また、関係束縛の加害なし群（ $\bar{X}=6.51$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=5.28$ ）の得点よりも高く、「高群」は「なし群」よりも束縛感が強いことを示していた。

③DV加害者（男性）

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、怒り得点（ $F(2,163) = 12.42, p < .001$ ）、DV知識（ $F(2,163) = 7.81, p < .001$ ）、関係束縛（ $F(2,163) = 5.49, p < .01$ ）、基本的社会性（ $F(2,163) = 3.90, p < .05$ ）、性役割（ $F(2,163) = 3.16, p < .05$ ）であった。Tukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の加害中低群（ $\bar{X}=21.94$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=19.00$ ）の得点よりも高く、「高群」は「中低群」よりも社会性が低いことを示していた。同様の結果として、性役割の加害中低群（ $\bar{X}=17.44$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=15.19$ ）の得点よりも高く、「高群」は「中低群」よりも性役割に対して平等主義的でないことを示していた。また、怒り得点の加害なし群（ $\bar{X}=22.13$ ）、加害中低群（ $\bar{X}=22.13$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=27.65$ ）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。同様の結果として、関係束縛の加害なし群（ $\bar{X}=6.21$ ）、加害中低群（ $\bar{X}=5.85$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=4.74$ ）の得点よりも高く、「高群」では他の群よりも束縛感を強く感じていた。同様に、DV知識の加害なし群（ $\bar{X}=4.55$ ）、加害中低群（ $\bar{X}=4.30$ ）の得点は加害高群（ $\bar{X}=5.19$ ）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりもDV知識が低いことを示していた。

3) バトル群の特徴の男女差

被害者、加害者と同様に、バトル群の特徴を探るため、まず、3群での諸変数の平均値を比較するための一要因の分散分析を行い、次に、Tukey法（5%水準）による多重比較を行った。3群の平均値と結果をTable6に示した。

Table6 バトルの程度による平均値比較

	A 被害加害なし群 (全体: N= 71) (女性: N= 40) (男性: N= 31)		B バトル中群 (全体: N= 37) (女性: N= 17) (男性: N= 20)		C バトル高群 (全体: N= 40) (女性: N= 20) (男性: N= 20)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A-B	B-C	A-C
基本的社会性	22.55	4.61	22.43	4.23	19.23	4.87		*	*
	23.40	3.55	21.35	4.82	19.70	5.18			*
	21.45	5.57	23.35	3.53	18.75	4.61		*	
怒り得点	21.97	4.96	21.73	4.31	26.35	6.41		*	*
	22.50	4.69	23.59	4.06	26.30	5.69			*
	21.29	5.30	20.15	3.94	26.40	7.21		*	*
関係満足	12.24	2.44	12.43	2.48	11.18	3.04			
	12.53	2.35	12.12	2.37	11.65	2.72			
	11.87	2.54	12.70	2.60	10.70	3.33			
関係束縛	6.82	1.78	5.41	1.76	4.53	2.22	*		*
	7.05	1.72	5.29	1.69	4.45	2.14	*		*
	6.52	1.82	5.50	1.85	4.60	2.35			*
力関係	2.96	0.98	3.05	1.13	3.30	1.16			
	3.05	0.78	3.06	1.20	3.30	1.22			
	2.84	1.19	3.05	1.10	3.30	1.13			
DV知識	4.37	1.07	4.35	1.03	4.70	1.20			
	4.33	1.00	4.53	1.18	4.20	1.11			
	4.42	1.18	4.20	0.90	5.20	1.11		*	*
自尊得点	31.10	6.72	30.14	6.62	27.65	6.25			*
	30.38	7.54	30.76	6.24	27.45	6.49			
	32.03	5.47	29.60	7.04	27.85	6.18			
他者尊重	18.66	3.78	19.49	4.14	17.60	3.50			
	19.13	3.43	18.71	3.16	17.35	3.86			
	18.06	4.17	20.15	4.80	17.85	3.18			
性役割	18.18	3.86	18.35	4.64	16.88	4.30			
	18.83	3.48	18.94	3.65	18.95	3.91			
	17.35	4.21	17.85	5.38	14.80	3.69			
アサーション	23.68	6.72	22.76	5.76	22.18	5.99			
	24.43	6.22	22.88	4.70	22.95	5.79			
	22.71	7.31	22.65	6.65	21.40	6.23			

上段:全体、中段:女性、下段:男性

*: p<.05

①バトル群 (全体)

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性 ($F(2,145) = 7.47, p < .001$)、怒り得点 ($F(2,145) = 10.57, p < .001$)、関係束縛 ($F(2,145) = 19.93, p < .001$)、自尊得点 ($F(2,145) = 3.55, p < .05$) であった。Tukey法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の被害加害なし群 ($\bar{X}=22.55$)、バトル中群 ($\bar{X}=22.43$) の得点は、バトル高群 ($\bar{X}=19.23$) の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。同様の結果として、怒り得点の被害加害なし群 ($\bar{X}=21.97$)、バトル中群 ($\bar{X}=21.73$) の得点はバトル高群 ($\bar{X}=26.35$) の得

点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りが高いことを示していた。また、関係束縛の被害加害なし群 ($\bar{X}=6.82$) の得点は、バトル中群 ($\bar{X}=5.41$)、バトル高群 ($\bar{X}=4.53$) の得点よりも高く、「なし群」では他の群よりも束縛感が弱いことを示していた。さらに、自尊得点では、被害加害なし群 ($\bar{X}=31.10$) の得点はバトル高群 ($\bar{X}=27.65$) の得点よりも高く、「高群」は「なし群」よりも自尊心が低いことを示していた。

②バトル群 (女性)

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、関係束縛 ($F(2,74)=14.99, p<.001$)、基本的社会性 ($F(2,74)=5.15, p<.01$)、怒り得点 ($F(2,74)=4.12, p<.05$) であった。Tukey法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性の被害加害なし群 ($\bar{X}=23.40$) の得点は、バトル高群 ($\bar{X}=19.70$) の得点よりも高く、「高群」は「なし群」よりも社会性が低いことを示していた。同様の結果として、怒り得点の被害加害なし群 ($\bar{X}=22.50$) の得点はバトル高群 ($\bar{X}=26.30$) の得点よりも低く、「高群」では「なし群」よりも怒りが高いことを示していた。また、関係束縛の被害加害なし群 ($\bar{X}=7.05$) の得点は、バトル中群 ($\bar{X}=5.29$)、バトル高群 ($\bar{X}=4.45$) の得点よりも高く、「なし群」では他の群よりも束縛感が弱いことを示していた。

③バトル群 (男性)

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、怒り得点 ($F(2,68)=7.35, p<.001$)、関係束縛 ($F(2,68)=5.76, p<.01$)、基本的社会性 ($F(2,68)=4.64, p<.05$)、DV知識 ($F(2,68)=4.84, p<.05$) であった。Tukey法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のバトル中群 ($\bar{X}=23.35$) の得点は、バトル高群 ($\bar{X}=18.75$) の得点よりも高く、「高群」は「バトル中群」よりも社会性が低いことを示していた。また、怒り得点の被害加害なし群 ($\bar{X}=21.29$)、バトル中群 ($\bar{X}=20.15$) の得点はバトル高群 ($\bar{X}=26.40$) の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りが高いことを示していた。同様の結果として、DV知識の被害加害なし群 ($\bar{X}=4.42$)、バトル中群 ($\bar{X}=4.20$) の得点はバトル高群 ($\bar{X}=5.20$) の得点よりも低く、「高群」では他の群よりもDV知識が低いことを示していた。また、関係束縛の被害加害なし群 ($\bar{X}=6.52$) の得点は、バトル高群 ($\bar{X}=4.60$) の得点よりも高く、「高群」は「なし群」よりも束縛感が強いことを示していた。

IV. 考 察

DV被害、加害における実態に関しては、前報において報告したところである。本報では、性差を中心にして考察していく。

まず、DV被害およびDV加害経験の有無であるが、被害経験は男女共に75%程度有り、加害経験は女性が11ポイントほど少ないものの、男女で約6割の者が加害経験がある。これは、従来からの「女性は被害者、男性は加害者」というステレオタイプでは語られない状況にあることを示している。女性に対して被害者にならないために、男性に対して加害

者にならないためといった、ステレオタイプの教育では、問題解決にならないことを示していると言える。

次に、DV被害および加害経験の内容の内訳について考える。一般的にDVといえば、身体的暴力を思い浮かべ、次に心理的暴力を考える程度の認識であると思われる。そこで、さらに暴力の内容を細分化し状況を把握することを試みた。全体的には、被害、加害共に、「社会的」な項目、「特権」の項目の経験率が高く、3位あたりに「心理的」な項目が高率であった。理解されにくい暴力についても理解を深めてゆくことの必要性が示された。「特権」に関しては、女性が被害者、男性が加害者のように思われがちだが、結果は違っていた。設問の内容からは、男女共に自分の意思を通そうとするわがままな要素も感じ取れそうである。また、男女差では、「性」加害、「強要」加害が男性に多いことが示された。従来から言われている男らしさからすれば、男性は先頭に立つ、女性をリードするのが当然と思われるのかもしれないが、相手の同意を得ずして行えば、当然、暴力となってしまう。それに呼応して、「性」被害は女性のみであるかと思えば、そうではなく、男性被害も4分の1（25.9%）程度あった。女性に性関係を迫られて困った、あるいは、仕方なく関係を持ったという男子学生の声もあるほどである。ここでも、被害者、加害者像のステレオタイプ的な見方では考えられない結果が示された。さらに、従来からの考え方でいけば、「身体的」な被害は女性のみということになるが、ここでは、男性の被害経験率も3割近く（28.9%）あった。女性側にも男性に対しては身体的加害を与えてもそう問題ではないという感覚があるのかもしれない。しかしながら、設問項目では、平手打ち、なぐる・ける、首を絞める、凶器で攻撃、が提示され、その頻度を問うているのみであり、平手打ちや、なぐる・ける、の強度の明記はない。よって、男女共に同じように被害経験は測定されているはずであるが、一般的な男女の腕力差を考慮すれば、被害程度には差が見られると推測される。

被害と加害の関係を男女別に見てみた。結果としては、どちらかの性が一方的に被害者であるや加害者であると言えないことが示された。また、前報で、被害者でもあるが加害者でもある者の存在を指摘し「バトル群」と名付けたが、本報では「バトル群」の存在を男女共に確認した。

暴力の有無やその頻度から、分析対象者を幾つかの群に分け、その特徴を男女別に分析した。

被害の男女差で特徴的なことは、男性被害者のDV知識の低さと、自尊感情の低さであった。前報でも述べたが、従来より、女性被害者の自尊感情の低さが指摘されていたが、今回の結果では、自尊感情の低さが男性被害者にのみ認められた。前報同様に、自尊感情の低さ故に、被害者になったのか、被害者になったが故に自尊感情が低い結果になったのかは判別できないが、男性の自尊感情についても注視する必要性がでてきたように思われる。一方、女性では、両者ともに差異が無いが、関係束縛にすべての群間で差異が認められ、被害が頻繁であるほど束縛感があるという結果になった。男性は被害高群が他の群よりも束縛感があるという結果であった。

加害の男女差で特徴的なことは、男女ともに怒り特性が加害高群で高いことであった。

これは加害なので当然の結果であろう。また、関係束縛については、被害と同様に、分析対象者全体ではすべての群間で差異が認められ、男女別では男女共に一定限の差異が認められた。男性に関しては、被害と同様に、加害者のDV知識が低かった。さらに、男性の加害者は、性役割に対して平等主義的ではないとなった。加害者更生のことは前報でも触れているが、ここからも男性の意識改革の必要性が指摘されたように思われる。

バトルの男女差で特徴的なことは、男女共に怒りがバトル高群で高く、関係束縛も同様であった。さらに、被害、加害と同様に、男性のバトル高群はDV知識が低いという結果であった。

被害、加害、バトルを通して、社会性の低さは男女共にあった。また、男性はDV知識が低いという結果であった。何がDVとなるのかを理解していないように思える。そこには、相互理解、相互尊重の欠如が推測される。さらに、男女共に関係束縛の問題が表出した。特に、被害女性の束縛感は強い。しかし、一方で、加害男性の束縛感も強いという結果となった。どちらも同じ設問であるので、被害女性も束縛されていると感じ、加害男性も束縛されていると感じているということになる。バトル群でも関係束縛は同様の結果がでている。男女共に、束縛関係にならない自立した生き方を考えることが重要になってくると思われる。前報の基本的社会性の問題、怒りのコントロールの仕方も含め、男女共通の課題のように思われる。DVもデートDVとして、低年齢化してきている。今後の教育現場において検討する課題であると考えられる。

ステレオタイプ的な男女観では説明が付かない状況が見て取れたと思われる。問題のところでもふれたように、ジェンダーに関しての行動と意識との交錯が見られるように思われる。

筆者らは、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの視点から、性を総合的に捉え、女性の生涯の、広い意味での健康を支援できるような教育プログラムが作成できればと考えている。そしてこれまでに、生物学上の問題だけではなく、ジェンダー問題として、さらに、男女相互理解の観点より男性の健康も総合的に考えていく必要性や、教育の観点からキャリア教育との共通性も示唆された。今回の研究においては、大学生におけるデートDVにおいて、男女の関係性の問題、特に束縛感に関する知見も得られた。この問題について、さらに、男女の付き合い方の逆転現象や勢力構造から、女性加害者やバトル群の存在についてその原因やプロセスも考えて行きたい。今後も、男女がともにあるリプロダクティブ・ヘルス／ライツ教育プログラムの作成にむけて、広い視野で、総合的な教育プログラムに発展させていくことが出来ればと考えている。

謝 辞

本調査の実施に際し、ご協力くださった皆さんに深く感謝する。

なお、本研究の一部は2008年度第30回日本家政学会関西支部研究発表会にて発表したものである。

参考文献

- 1) 赤澤淳子「青年期後期における恋愛行動の規定因について：関係進展度、恋愛意識、性別役割の自己認知が恋愛行動の遂行度に及ぼす影響」、『仁愛大学研究紀要』第5巻pp.17-31、2006年。
- 2) 西岡敦子、小牧一裕「『リプロダクティブ・ヘルス/ライツ』に関する調査Ⅶ—社会性と避妊行動について—」、『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』第20巻、第3号、pp.33-43、2007年。
- 3) 西岡敦子、小牧一裕「『リプロダクティブ・ヘルス/ライツ』に関する調査Ⅷ—デートDVの現状、および、被害・加害の関係とその特徴—」、『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』第21巻、第3号、pp.35-53、2008年。
- 4) NPO法人DV防止ながさき『大学生におけるDVに関する認識についての調査』2007年。
- 5) 「夫（恋人）からの暴力」調査研究会、『ドメスティック・バイオレンス [新版]』、有斐閣、2002年。
- 6) 相馬敏彦「博士論文 親密な関係における排他性が個人の適応に及ぼす影響」大阪大学人間科学部博士論文、2005年。
- 7) 相馬敏彦「親密な関係において暴力をふるう男女の愛着モデル」、『日本心理学会第70回大会口頭発表会要旨集』pp.263、2006年。
- 8) 鈴木淳子「平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成」、『心理学研究』第65巻、pp.34-41、1994年。
- 9) 鈴木 平、春木 豊「怒りと循環器系疾患の関連性の検討」、『健康心理学研究』第7巻、pp. 1-13、1994年。
- 10) 山本真理子、松井 豊、山成由紀子「認知された自己の諸側面の構造」、『教育心理学研究』第30巻、pp.64-68、1982年。
- 11) 山岡 拓「MJ若者意識調査 異性との付き合い「面倒」」、日経流通新聞、2008年10月29日。
- 12) 山岡 拓「MJ若者意識調査 「男」仕切らず、「女」着飾らず」、日経流通新聞、2008年10月29日。